



第五卷 第貳號

大正九年四月一日發行

(通卷第十八號)

研 究

水戸學派の攘夷論

井野邊 茂雄

一 緒 言

明らかなるが如くにして、今なほ明らかならざるものは幕末に於ける攘夷論の意義なり。近世の史を論ずるもの往々にして、攘夷論を以て、外國に對して無暴の戰を開くにありと爲し、或は世界の大勢に暗くして、鎖國の舊套を墨守せんとする保守主義なりと爲し、更に甚しきに至りては、攘

夷は前提にして同時に結論なりといひ、或はまた攘夷論の根據となれるものは儒教の對外思想なりといへり。<sup>\*</sup> 攘夷論の誤解せらるゝことまた大なりといふべし。かるが故に幕末人士の爲に傳を立つるもの、概ね開國論者の爲には其先見を誇稱し、攘夷論者の爲には苦しき辯護を試みんとす、蓋し開國攘夷なる文字に拘泥し、開國論を唱ふる者は

悉く識見に富み、攘夷論を唱ふる者は大勢を解せずと思へるなり。開國攘夷の意義何ぞかくの如く單純なるものならんや。それ水戸藩は天保以降嘉永安政の交にかけ、攘夷論の本鐸として其勢力一世を風靡せるものなれば、今暫く之を代表的に選擇し、以て所謂攘夷論の意義を釋ね、其性質を明らかにせんとす。

## 二 藤田幽谷の攘夷論

水藩にありて最も早く外患に留意せるものを立原翠軒と爲す、然れども其遺書未だ世に出でざるが故に、經綸の策の如き亦釋ぬるに由なし。殊に彼は佐幕の見を有し、水藩傳來の尊王主義に異論を立つるものなれば、嚴正なる意味に於ての水戸學派中に於て、對外の策論を講じ、攘夷論を主唱せるは實に藤田幽谷に始る。寛政九年藩主徳川治保への上書に曰く、

夫今代以武立國、讎寇以來幾二百年、海内晏

然莫有鼠竊狗盜之警、民至老死不知兵革、太平之盛開闢以來所無也、武人兵士世官世職、酒肉之池歌海之海、蕩耳目治筋骨、天下滔々醉世夢死忘戰之危、亦開闢以來所無也、而北溟點虜窺窺神州常有圖南之志、奈何今人小智不及大智、妄以斥鷃之見晒大鵬之所爲、所謂厝火積薪之下而寢其上、火未及然、因謂之安、當今之勢是已、天下之憂孰甚於此、而我藩負海作邦、與寇隣接、尤不可以無豫備、豈閣下因循姑息、玩歲愒日之時也哉、三家鼎立海內巨鎮、而閣下德望之隆天下所倚賴、異日幕府或有諮訪、則閣下豈可循默哉、然則乃廟堂之秘籌密策、固非草野之人所宜輒言、而閣下命世之英略、當既有熟算於胸中、則固無埃狂愚若<sup>臣</sup>者之言矣、獨一國之政至近至切、而上下貧弱離心離德、由今之道無改今之俗、一旦緩急豈足折衝方面乎、孫武有言、勿恃其不來、

特吾有以備、願閣下慨然發憤、用剛克之德施  
更張之政、無爲婦人之仁、無事匹夫之諒、惠  
而不費、與民同好惡、激厲群臣黜陟必行、國  
可富兵可強、而民信可立矣、

幽谷はかくの如く夙に海警の懼るべきものあるに  
注意し、露國南漸の大勢力を意識したれば、之を  
以て天下の深憂と爲し、而して水藩の領土海に接  
するが故に豫め其備を爲さざる可からざるをいひ  
即ち此機に乗じて革新の政を布くの必要あるを論  
じたる後又曰く、

今北虜之弊歲切一歲、而當路之人率喜無爲、  
常鎮以靜、以臣觀之、其不知時甚矣、如寬永  
天帥之變、雖世既屬太平、然去戰國未遠、驍  
將悍卒不甘死牖不者所在有之、桀驁諸侯睥睨  
時口者未必無之、一旦騷擾將激天下之變、故  
幕府雖速運方略發兵征勦、然視如鼠竊狗盜不  
足以爲憂者、時或淫獵以示無事、此靜以鎮之

術也、今海内皆溺於宴安矣、以已量人、夏蟲  
疑氷、若有兵事者笑以爲狂、皆曰苟當吾世無  
事是可也、遑恤其後、故英主在上鼓舞作興、  
猶恐其愉惰不振、而乃用鎮靜之術、是猶教採  
升木也、不亦惑乎、孫臏滅竈而虞詡增竈、豈  
好相反哉、各從時宜也、昔北條氏爲政鎌倉也  
執蒙古之使而斬其首、以明示與彼絕、乃令諸  
州曰、蒙古將襲我不可不備、天下將士宜務儉  
約資軍用、於是將士人々爲備、遂得殲彼十萬  
之衆於西海、雖賴宗社垂祐神風助威、抑亦北  
條經略得宜之力也、前年虜使之來、甘言重幣  
以誘我、恫疑虛喝以威我、廟堂無人禮而遣之、  
偷一日之苟安而惰天下之士氣、堂々幕府曾不  
若北條氏乎、閣下縱不能建議于幕府、以數旣  
往之過、亦何無激勵一國士大夫之術乎、夫在  
無事之日爲教戰之事、固有平地起波之嫌、然  
有爲之君安不忘危、必作內政以寓軍令、自有

北虜之警幕府屢嘗下令、使綠海諸侯豫備不虜、此強兵之良機不可失也、閣下何憚而不敢爲乎、

臣竊爲閣下惜之、(幽谷先生封事稿)

これ幕府が常に海外諸國との衝突を避くるに苦心し、非戰の主義を採れることを非難せるものにして、主眼は攘夷にあり。(幕府は家光在世の時より、外船渡來の際彼より兵端を開かざる限り、我より攻撃すべからざることを諸大名等に戒め、常に非戰の主義を採り、以て幕末に及ぶ、文化の打拂令の如きも、形式の變化にして主義の變化せるにあらざりき)故に文化年中露人の入寇するや、悲憤慷慨、朔漠を馳驅して胡塵を拂ふの志あり、又文政七年英人數名同藩大津濱に上陸せし折には當時十九歳の青年たりし其子東湖に命じて曰く、頻年醜虜邊海を窺竄し、時に或は大砲を發して我人民を震驚せしむ、傲慢無禮なりといふべし、然るに世を擧りて姑息に流れ無事を尊ぶ、吾れ其或

は放還の策に出で、一日の安を苟もせん事を恐る汝速に大津に趣きて動靜を窺ひ、若し放還の議決したりと聞かば、直に夷人の舎に入りて夷虜を塵にし、然る後從容官に就きて裁を請ふべし、事一時の權宜に出づといへども、庶幾くは少しく神州の正氣を伸ぶるに足らん、吾れ不幸にして女子多く唯汝一男あるのみ、汝死せば吾が祀絶へん、これ吾れ汝と共に命窮するの時なり、汝願慮すること勿れと。東湖將に結束して起たんとす、會々幕吏英人を放還せりとの飛報あり、東湖遂に發せずして已めり。

今幽谷の策論を讀みて其意の在る所を考ふるに泰平既に二百年を超えて幕府の隆治は其極に達し士民相率ゐて文弱に流れ歡樂に耽り、武備衰へ士氣地を掃ふの今日俄に外患を受く、豈容易く之を防禦することを得んや、宜しく天下を擧げて必戰の覺悟を定め、來りて寇なすものは悉く之を塵に

すべしとの意氣を振起し、兵を練り武を講じ氣節を尊ぶべし、然る後始めて能く外患より免れ、國家の獨立と權威とを維持することを得んといふにありき。従うて其攘夷論は、我國を威嚇する外國勢力に對しての正當防衛を意味すると共に、更に外患の意識を高め、是によりて士氣を鼓舞し人心を統一し、眠れる如き國民を覺醒せしめんとするの手段を含む。かるが故に幽谷は力めて國民を刺激し、其敵愾心を挑發せんとす。東湖に命じて英人を屠らしめんと企てしが、如き其意蓋し茲に基く。要するに幽谷の攘夷論は、我に寇なすものを掃攘し、同時に國民をして護國の精神を盛んならしめ、以て帝國の萬安を期するにあり。鎖國又は開國といふ見地以外に策論の基礎を有す。人若し之を以て鎖國論なりと思はゞそはゆゝしき誤解なり。幽谷嘗て歲旦の詩あり、曰く、

春來一夜斗廻杓、北顧還憂胡虜驕、

投筆自憐班定遠、 忘家誰擬霍嫫姚、

長蛇應畏神兵利、 粒食曾資瑞穗饒、

宇內至尊天日嗣、 須令萬國仰皇朝、

宇內萬國をして皇朝を仰がしめ、天日嗣の御稜威大八洲の外に輝かんことは幽谷の理想とする所なり、是豈鎖國退嬰に満足するものならんや。其歸着點が國運の發展にあり開國進取にあり宇内の統一にありし事明らかなり。蓋し幽谷が水戸學の成形に苦心努力したる寛政享和文化の際は、我國民が外國勢力の壓迫を感ずること漸く深からんとする時勢なりしかば、其策論も亦自ら殉國の精神を發揮せしむるに重きを置き、敢て其他に及ばざりしが爲のみ。

### 三 會澤鷗齋の攘夷論

水藩の攘夷論は幽谷によりて提唱せられし後、東湖及び會澤鷗齋等其意を繼承して益々之が宣傳に力め、遂に天下を風靡するに至る。東湖の攘夷

論は暫く之を下文に譲り、先づ文政八年に成れる  
蕙齋の新論を觀察すべし。

抑も新論の一篇は蕙齋の對外意見を説きたるものにして、之と共に國內の政治をもいたく變革し内外相俟ちて外患を防ぎ國威を發揮すべき事を論じたり。いま其一斑を擧ぐれば、蕙齋は英露二國の勢力が漸く我國に迫れるよしを述べて國民を警め、外人の人の國を奪ふや常に貿易と宗教とを以てすと語り、嘗て葡西兩國が此術を採りて我に臨める歴史を回顧し、又更に英露二國が互に策應して我を覬覦するにあらざるやを疑へり。且露國が志を支那に得ざる勢を轉じ、まづ略し易きの蝦夷に垂涎せるは畏るべきものなりとて、其最も擯斥せざる可からざる所以を論じ、支那とは同憂唇齒の關係あれば相親しむの必要あるをいへり。

按ずるに西洋諸國が宗教と貿易とを以て侵略の方便に供するよしは大原左金吾の北地危言に初見

し、英露二國の通謀を疑へるは大槻玄澤の捕影問答に載せ、(文化五年八月英艦フェートン號が長崎にて狼藉せる時、和蘭事務官ドユーフは長崎奉行松平康英に説くに、英露は同盟の國なれば、嚴重の沙汰ありては後難を醸すの恐ありといひ、其出帆退去後提出せる意見書にも、英は露と交誼厚きが故に、露の爲めに長崎の要害を視察せんとして、辭を蘭船の捕獲に借りし事疑ふべからすといへる事あり。) 排露親清の策論は佐藤信淵の海防策にいへり。かゝる所説を有せるは水戸學派の士のみにあらざりき。蓋し葡西二國の侵略政策は、嘗て我國民をして戰慄せしめ憤怒せしめたる事實にして儼として其記憶に存す。外患に對する意識が古き歴史を回顧し、同じ杞憂を抱かしむるに至れるは故なきにあらざるなり。十九世紀の天地は十七世紀とは同じからず。葡西兩國が實行せるがごとき露骨なる侵略主義は、此時既に廢棄せられたりと

せんにも、我等はなほ且現代未開國に於ける所謂白人宣教師なるもの、行動に照し、其必ずしも杞憂なりとのみは稱し難きを覺ゆ。當年の志士が之を口にせるは單に歴史の教訓に基き、それ以上深き智識を有せざりしかども、其意を以て國民に警告せるは敢て無益の業にあらざりき。遙か程經て我國の開國の處置を斷じ外人の渡來漸く繁きの際

彼等の横暴なる行爲は枚舉に違あらず。而も他の未開國に於けるそれと非常の相違ありしは、國民の元氣旺盛なりしに基くとはいへ、また攘夷論に負ふ所少しとせざるなり。(史家の近世史を説くもの、我國民の歐米人に對する非行のみを掲げて之を責め歐米人の邦人に對する非行に至りては一言をも費さず、公平の見解に非らざるなり。)さて

かの英露通謀の事は素より其形迹を認めざれども苟も利害關係をだに同じくせる場合には實現せられしやも圖り難く、既に十八世紀の頃、右の二國

が連合して日本を侵略すべしとの風説行はれ、歐洲の外交界は頓に活氣を呈したるにあらずや。我が先覺の士がかゝる場合を豫想して正當防衛の方法を講じたるは、誠に感謝すべき事なるべし。

憩齋はかくてまた外國勢力の侮るべからざる所以を論じて、當時世に行はれたる姑息説の反駁に力を用ゐたり。即ち我兵の精銳なりしは過去の事實にして、今や其頼むべからざるを説きて曰く、

庸俗又謂、自昔神州之兵精銳冠萬國、夷狄小醜不足憂焉、夫神州士勇兵銳、雖風土使之然、然世有汗隆時有變革、戰國之世士卒習戰、進退疾徐自合機宜、故塞旗斬將、其勇可得施也今士卒不見兵革二百年、一旦臨事、虛實之變奇正之用、誰能素練而熟習之、而怯者先辭陣勇者徒死傷勇、所謂精銳者未可恃也

また遠來の兵なりとも侮り難きを述べて曰く、庸俗又謂、虜絕海遠來、其兵不得其衆、自試

蟻臂不足憂焉、夫衆寡在勢、善用勢者、能因敵衆以爲吾勢、法曰、全國爲上、破國次之、不善用勢者、以吾衆助敵之勢、其衆不足恃也、昔西邊姦民闖出爲盜、適明國衰亂、群盜相嘯聚者引以爲援、號稱倭寇、陷沒州郡略無寧歲、及其就戮、我邊民在黨中僅二十五人、用以助聲勢、亦足以蹙宋明之命脉、故兵固有先聲、而衆寡無定形、夫善用兵者、豈獨因糧於敵、而亦可以因衆於敵也、虜用妖教詭術以誘人之民、萬一使彼引我民以援其勢、則彼之寡與我之衆、亦惡可恃也

露國は其本國遙かに隔る、遠來の兵容易に日本を窺ふ可からずとは、中野柳圃の鎖國論・土生懋齋の發不恤緯に見え、日本の武勇を過信せることも亦柳圃の鎖國論に説く所、並に文化年中露人侵掠以前の筆に係ると雖も、其以後なほ同じ思想の系統を辿る者ありと見えたり。憩齋の之を論ずる亦

故ありといふべし。憩齋又曰く、

偷安之徒動謂、彼爲漁爲商、固其常事、不足深慮焉、何其不思之甚也、虜航海萬里、而伺人國家、不得不因糧於敵、故所至或商或漁、莫非以爲屯田之用也、不然使彼徒欲獲鯨乎、則其近旁海中捕鯨之處亦多、而何必遙々度絕險而捕之東洋乎、略註而其爲船制、可以漁可以商、亦可以戰、則惡知今日之漁船商船、果不爲異日之戰艦也

此説は高橋景保が文政七年七月幕府への上書に見えたれば之を駁するにあるべし。當時太平洋方面には鯨數いたく減少したれば、捕鯨業者はいづれも皆獵所を太平洋に求めたりき。他日米國が日本の開國を促がせる素因の一亦茲に存すれども、憩齋は未だかゝる事情の伏在を知らず、徒らに杞憂を重ねしのみ。蓋し誤解に出づと雖も、所見既に此の如くなりとせば攘斥は必然の結果なり。



惣齋また長崎貿易の改正を論じて曰く、「番船交易多虧無用、而弁金銅海外、不可不停也」と、これ新井白石以來識者の常に唱ふる所にして、亦當年に於ける貿易状態の實際なりき。されば開國論者たる本多利明も其著蝦夷道志邊寛政十三年の作に和蘭との貿易を説きて、

渠が持渡る所の産物は悉皆腐れ朽、永久に止むべき品物なく、日本より取込所の金含銅は永久不朽の長貨にして實に國家の骨膏なり、惜み歎くべきの頂上なり

といへり。要するに長崎貿易の現状に満足する能はざりしは識者の通議たり。故に或者は之を改正して完全なる貿易を行はんとし、或者は之を縮小せんとし、又或者は貿易の閉止を期せり。本多利明等は第一説を採り、白石以下幕府の有司等は第二説を採り、惣齋は即ち第三説を採る、(青木與勝の答問十策に、支那との貿易は縮少して存し、和

蘭との貿易は全く停止すべしとあり、惣齋と同じ意見なるべきか。所論異なれりと雖も、其弊を矯めんとするに至りては全く相同じ。而して此所見が鎖國論を以て見るべからざる所以は下文に述べんとす。

かくて惣齋は攘夷の策論に及びて曰く、

凡守國家修兵備、和戰之策不可先定、二者未決則天下汎々然莫知所向、紀綱廢弛上下偷安而智者不能爲謀、勇者不能爲怒、日又一日、坐使虜謀稔熟、拱手待敗者、是皆坐於内陰有所懼、而不敢斷故也、略○中臣故曰、和戰之策先決於内、斷然置天下於必死之地、然後防禦之策可得而施也、今虜但請通市未至戰、和戰之策似非所論、然世不知通市之害者其心畏戰、其策必出於和者也、能痛拒絕通市者、雖其勢至於戰而不畏者也、凡事豫立、二者得不豫決哉

故に幕府の發布せる文化打拂令に賛同せりと雖も其効果の空しきを憂ひて、

今攘夷之令布天下、因天下羞惡之心、以明大義於天下、天下知所向矣、固宜感憤激勵、日夜相勤勉、智者獻謀勇者致死、大有所振起作興、速驅除驕虜、以立大義於天地也、而偷惰之俗未改、其能以必死自期者蓋無幾也、夫去佚樂而就憂苦、本非人情所欲、習安懷居滔々皆是、攘夷之令雖布、而世未有實攘夷者、守禦之策亦未聞大有所釐革創立、則民未知號令之必可信、其衆心未決於戰、而天下兵士未甚陷亦不宜乎

攘夷の令既に天下に布かれて士民なほ安逸を思ふかくのごとくにして何ぞ外患の急に應ずるを得んや。是に於て憩齋は遂に攘夷の實行を期せり。

今實一攘夷、則天下泄々々聳然知所警矣、然後使玩愒歲月者、如登高去其梯、所以投之無

所往、而其欲使兵士不懼莫要焉、○中夫如是、天下智勇之士亦皆奮然、輸赤誠宣忠力、誓不與虜生、東西馳騁、爭自報効、萃天下之智勇於廟堂、廟堂一揮、令行如響、義氣溢天下、然後可以大有所振起作興也

かるが故に國民をして外人を惡むこと仇敵のごとくならしめざるべからずとて左のごとく云へり、  
繆聽西夷妄說、稱揚眩惑、以助長黠虜逆焰、則宜痛禁絕之耳、或有犯禁者、處以造言亂民之刑、而見蠻貊蠻藥及輒弱之屬、必焚燬破裂不許服用、使民賤戎狄如犬羊、惡之如豺狼憩齋既に外人の覬窺を疑ひ、國民を必死の地に置きて守禦の策を講せんとす、外人を賤むこと犬羊の如く、之を惡むこと豺狼のごとくならしむべしといへるもの、蓋し當然の結果ならんのみ。

按ずるに佐藤信淵は有名なる開國論者なり。憩齋が新論を著はしたると殆んど時を同じくして防

海策(文政五年の作)宇内混同秘策(文政六年の作)を著し、通商貿易の天理に協へるを説き、之にあらざれば國家の富強を期し難しとて開國の論を唱へ、併せて國家膨脹の策議を建つること頗る詳かなりき。然るに彼は程經て天保九年に至り、蘭人の警告に基く所謂モリソン一件起り、和戰の論上下に囂きの際、俄に態度を改めて攘夷論に豹變したりき。其説に曰く、

總體日本人は智慧が短く膽が小き故、誰々も莫利宋が來るといふ事を怖るゝなれど、愚按にては何分昇平久敷大眠といふ時節なれば、却て恭悦と思ふなり、ごうを莫利宋殿が江戸近海にて、二三十發もボン／＼とやる様なる都合に押し移りなば、求てもなき日本國中のよき御目醒と思ひける也、勿論夢物語○高野長英の著作の説も重々尤にて、事の有無も問はずして、あたまから手荒き事をしては、彼がボンボン

をするに辭あらしむるといふもの故に、漂流人受取方萬事おとなく取扱ひたる上にて、彼より交易を願出しなば、急度嚴重に交易はならぬ、此以後は海岸に於て薪一本水一滴もやることならぬと申渡しなば、莫利宋も立腹して、折角態々數萬里の波濤を凌ぎ、日本人を護送し來り候上に、前々より日本海岸に於ては、暗厄利亞船と見れば、火炮を打ちかけ又は支那阿蘭陀には交易を許しながら、前度の魯西亞此度の我等には何故に御免許無之哉然ば東海にある屬國を引つれ來り、一戰勝負の上交易の論に及んなどいふ様なる事を起して呉れたら、彌以重疊の事なるべし、其故に孟子にも入ては則法守拂士なく、出ては則敵國外患なき物は國恒に亡ぶともあるがごとく、日本は滄海中の孤島、支那の如き地續きの、周の世の玁狁、唐の世の契丹といふ様なる

外患がなき故に、彌以て武備も衰へ、四海中の  
 眼りも深きからは、無事御目出度は子供に砂  
 糖にて、ボン／＼は良薬かと思はるゝなり、  
 略<sup>○中</sup>此ボン／＼の震雷の響きに應じ、どこぞ  
 から胡澹菴揚椒山が掛けて來て、數百年來  
 の舊弊を一洗して、下々迄悦服する程になつ  
 て、此日本國が一九けに成て防ぐといふ日に  
 成ては、いか程も草莽の間より英雄豪傑が躍  
 出て、假令支那暗厄利亞魯西亞が一時に攻來  
 ても、元來武に勝れたる我國なれば、どんな  
 事でも外國に負る氣遣はなきこと故に、吳々  
 國體蕭牆の内さへ青天金石の如く、至正至堅  
 にましまさば、莫宋宋に交易を許さぬのみか  
 支那和蘭陀の交易までも停止して、此後は外  
 國どもを一寸も海岸に寄付ぬ様にするが、大  
 日本萬々年御永久の長策なるべし(夢々物語)  
 これ砲火の洗禮によりて國民を覺醒せしめんとす

るの説なり。かくて信淵は、嘉永元年には、外船  
 屢々渡來して國禁を犯すものは、幕府が之を打拂  
 はざるが爲なり、宜しく姑息の仁惠を停め、爾來  
 我沿岸に來るものあらば直に掃攘すべしとの激論  
 を唱へ(吞海壁基論)翌二年には支那を助けて相共  
 に英國を挫くべしとの策議を述べたる春華挫狄論  
 を作る。蓋し信淵は開國貿易の説を蓄へながら、  
 今や之を束閣して主戰攘夷の論を取り、敵國外患  
 の意識を深からしめて人心を統一し、情弊を刷新  
 せんとす、策論にして學說にあらざるなり。憩齋  
 の意見亦全く之と同じく、信淵が天保弘化嘉永の  
 際に主張せる所を十餘年の前に提唱せるのみ。

憩齋はかゝる攘夷論を説くと共に、更に政治を  
 革新するの必要を唱へ、内政を修め、軍政を飾へ  
 邦國を富まし、守備を頌つの四事は、目下の最大  
 急務なるをいふ。即ち内政を修むるには、士風を興  
 し奢靡を禁じ萬民を安んじ賢才を擧げざる可から

す。軍政を飾ふには、驕兵を除き兵衆を増し訓練を精ふせざる可からず。其要武士をして土着せしむるにあり。邦國を富ますには、富豪の勢力を抑へ諸大名を庇護し參勤の制度を變革せざる可からず。守備を煩つには、屯兵を置き保障を設け烽燧旌旗號炮の制を定め、海軍を興し洋式の巨艦を造り、沿岸に砲壘を築き大小砲を鑄、資糧を貯へざる可からず。就中江戸・京都・大阪・房總・伊勢・熱田・長崎等の守備を嚴にし、蝦夷及び海島には時に兵を派して巡視せしむべしとは其概要なりき。

對外政策が内政の完備と相俟たざる可からざることは、林子平海國兵談、杉田玄伯野叟、蒲生君平不恤等の風に唱道する所にして、海軍を興し巨艦を製し大小砲を鑄て其技を盛んにし、沿岸に保壘を設くべきことは林子平之を首唱し、海國、兵談、大原左金吾北地、危言、古賀侗菴擬極論、封事等後に之を和したり。敢て水戸學派の先見と稱すべきにあらざれども、熱齋等は予平

の徒と地位を異にし、三家の員に備はれる賢明の藩主を擁し、後年に至りて藩中の政治に其意見を實行するの機會を得たれば、水藩の勢力は所謂水戸學の普及を便利ならしめ、遂に一世を動かすに至れるなり。

熱齋はまた其目的を達せんが爲に、舉國の一致と人心の統一とを必要としたりしが、就中最も注意すべきは國體論及び尊王論にあり。蓋し熱齋の對外政策は國體論尊王論と無關係なる能はざりき。是に於てか國體の精華と皇室の尊嚴とを述べて、國家の成立と國史の成跡とを明らかにし、敬神尊王の大義を論ずる事頗る詳細を極む。以て茲に 擧げよりて曰く、

夫方今去古雖遠、所仰之至尊、則儼然天祖之正胤也、所治之蒼生、則依然天祖愛養之裔孫也、苟因人心之不可磨滅者、而設之教條、原於神聖所以淬礪天下之意、事天祀先、報本反

始、因以正君臣之義、敦父子之親、藁籥萬民以爲一心、豈甚難爲哉、此乃千載之一時、必不可失之機也、臣是以欲審弊之所由生、不得不眷々於邪說之害也、夫英雄通變、神化、無不可爲之時、無不可爲之事、而帝王所恃以保四海者、天人之大道、其文可變、其義不可易、則神聖所以經緯天地、使億兆皆親其上、而不忍離之意、雖今日亦無不可復行者焉、今時勢之變也、邪說之害也、雖天下不勝其弊、而欲更張作新之、顧所以處之之方何如耳

文中に所謂、之に處するの方といへるは上文に引證せる策論を指し、即ち對外思想と尊王思想との接觸を意味す。所謂尊王攘夷なる思想と策議との生せる所以蓋し此に在らん。此事は攘夷論の意義を語るの上に於て重大の關係あれば、重ねて下文に説く所あるべし。

抑々塾齋の攘夷論は其師説に基きて之を詳述せ

るもの、所論皆幽谷が嘗て唱道せる範圍を越えず攘夷は絶對の目的に非らざるなり。故に上代我國威の盛んなるや、列聖相承け、基業に據りて荒俗を服し、土疆日に廣まり百蠻皇朝を仰ぎたる成跡を贊美すると共に、中世以來廟堂遠大の略なく土疆日に蹙り、神聖天下を經營する所以の意熄みたるを慨き、更に近世に至りては、則ち夷狄強梁、素定の略を挾て以て其吞噬を違うること三百餘年、傲然として神州を砥據し、神聖夷狄を御するの略を倒用して中國を謀らんとすと憤慨せり。鎖國退嬰豈其志ならんや。

夫天下大業、萬世長策、固非朝夕之可就、天祖之業待神武而開、崇神而大、及聖子神孫繼述不忘、而皇化洽海内也、今畫一定之策、立不拔之基、必當内自中國外暨百蠻、上原於太初、下要於無窮、遵神聖之彝訓、紹東照之大烈、貽謀孫子繼々承々、千萬世如一日、必拯

四海萬國於塗炭、使天地間無復有西夷之妖教

中原赤子永免於胡羯之欺罔然後已、○中然後

大興敵愾之師、食天神之糧、揮天神之兵、仗

天神之仁、而奮其威、以方行天下、狹者廣之

險者平之、神武不殺之威震於殊方絕域、則正

欲使海內諸蕃來觀德輝、亦何屑々乎其伺邊誘

民之患也、古人有言、國之大事在祀與戎、戎

有一定之略、祀爲不拔之業、實國家之大事、

所以大觀天下、通視萬世、立一定不易之長策

者如此矣、夫明國體、審形勢、察虜情、脩守

禦、而立長計、實聖子神孫所以報皇祖天神之

大孝、而幕府邦君所以濟萬姓施無窮之大忠、

臣謹著五論、非臣之和言也、天地鬼神將與聽

之矣

是實に新論最後の結論なり。即ち開國遠略國家

膨脹の策論にして、攘夷は畢竟此に到達せんが爲

め的手段に過ぎざりしのみ。

#### 四 藤田東湖の攘夷論

水藩の攘夷論は略々憩齋の新論に盡きたりと雖

も、なほ之を詳にせんが爲め、更に藤田東湖の意

見に就いて述ぶる所あらん。東湖封事稿を按ずる

に、天保元年五月郡奉行（東湖憩齋及び山口頼母、

友部正介、田九稻之右衛門、吉成又右衛門の七名

なり）の建白に曰く、

富の大本は民の勤儉に相成候事專務ニ御座候

處、民の奢情ニ赴候ハ兵革と凶飢を忘候より

起り申候、凶飢之儀ハ天明より四十餘年に相

成候間今年ニも難計、兵革は二百餘年相止候

へ共、幸に當時夷狄邊境を窺候間、此機に乗

じ眞實の備を御設被遊候は、勤儉の大本相

立可申奉存候、○中武備之儀先日申上候通り

に御座候所、先づ第一に軍陣はなきものと存

じ居候風俗にては、武備も虚器ニ相成候間、

指當り眼前に寇戎有之候ものと心得させ候事

武備の根本と奉存候、乍去是も空言にて噓候ては不相分候事に御座候所、前文中上候通り此節夷狄邊海を窺、寶島亂妨之類も有之、北地當時一口く狭められ候勢、眼前には夷船度々奇怪を働き、旁油斷不相成時節、武備を修候には大機會を得、幸之時節に候間、御家中不日に人馬をも心掛候様に仕り、其實之武備を修候事、士民之怠惰を引立候大本と奉存候

これ外患を機として人心を一新し、根柢より政治を刷新せんとするの説なり。故に翌二年七月郡奉行（此時は東湖及川瀬七郎右衛門、吉成又右衛門石河徳五郎の四人なり）の建白にも攘夷の事を論じて曰く、

近來又々ヲロシヤイギリス等の異人ども、度々寄せ來候のみならず、松前長崎等亂妨いたし剩此度の如く廻船等へ狼籍に及候始末、不

届至極言語同斷に御座候間、是非一と御手段無之候ては罷成間敷奉存候、然る所右異船之儀うはのそらに相心得、天下總體之勢も不心得、太平の御代いつ迄も如此ものぞ存居候者は、盲人之蛇を不恐類に有之、○下

これ泰平を謳歌し戰を忌む人情世態を憤慨せるものなり。かくて東湖等は目下水戸の家中にて、志ある者は之を憂ひて策議する所二説あるを述べ、其一説は、武備の薄弱なること現時最大の缺點なれば、大砲を鑄大船を造り農兵を組織して變に備ふべしといひ、他の一説は、日本の武威衰へたるに乗じ外人等寄せ來ることなれば、武士の魂を入れ替へるが第一の急務なり、此根本さへ立ちなば枝葉は論ずるに足らずといふにあるを擧げたる後ち、第一説を批評して、

當時天下一統武を忘れ、太平柔弱の風に溺れ居候世の中に御座候ては、何程大船大筒等の



備出來候迎も、臆病者へ甲冑を爲着、兵具等爲持候に似寄候儀に而、表向は勇々敷可有之候へども、事に臨候はば一戰にも不及、敵の爲に物具等被奪取候儀は指見え申候、左候へば右の説も尤には御座候へども、其本を指置候て其末を論候説と奉存候

といひ、第二説を批評して、

武士の魂入替り根本の所相立候は、數萬の異人寄せ來候迎も一向恐るゝに不足儀に御座候處、根本と申事口にて申候こそやすく御座候へ共、事へかゝり候ては中々左様參候儀には無之、是は上○齊には御相續以來、御實地昭の上にて委細御承知被爲在候御儀、不及申上候

といひ、兩説共に完全ならざる所以を論じ、二者相俟ちて始めて其目的を達すべきを説き、更に對外政策に及び、幕府が文政八年に打拂の令を布き

たれども、徒らに其聲を大にするのみにして、却て其實なきを非難し、外人等猥りに我沿岸に近づき又は上陸するを打拂ふは、盜賊門内に入るを召捕るも同様なりと稱し、打拂の決行せざる可からざるを痛論せり。東湖等の意のある所窺ふべく、而して其論じたる諸條が、たゞに水藩のみに就きていへるにあらず、海内共に同一の情弊を有するを見て、之を天下の廣きに推し及ぼさんとせる事も亦明らかなり。故に

異船の儀は天下へ拘り候事に候へば、公邊にて非常の御決斷無御座候ては、御届被遊兼候御儀と奉存候

といへり。要するに外寇目前に迫り來れるものと覺悟し、攘夷の策を斷するにあらざれば、政治の刷新も國家の擁護も不可能なりといふにありき。天保九年徳川齊昭草する所の弘道館記に、「我東照宮撥亂反正、尊王攘夷、允武允文、以開太平之基」

とあり、尊王攘夷といふ新らしき熟語の使用せられるは蓋し此時に始まる。東湖之を釋して曰く、

堂々神州、天日之嗣、世奉神器君臨萬方、上下内外之分、猶天地之不可易焉、然則尊王攘夷者、實志士仁人、盡忠報國之大義也、(弘道館記述義)

尊王論と攘夷論とが益々相倚り相結びて、離るべからざるに至れる情勢察すべきなり。

東湖また弘化二年常陸帯を著はして齊昭の心事を述べ、所謂弘化國難の寃を天下に訴へたるが中に、攘夷の事に言及せる文字あり。即ち近時外國に對する處置に就きての意見區々なれども、歸する所は左の三説に過ぎず。其一は、天主教の害は惡むべきものなれば、祖宗の舊典を守り、打拂を勵行して夷狄を近づく可からず、上下共に大和魂を磨き、萬人心を一にして神國を守るべしといひ其二は、時に古今の變あり、舊典必ずしも守るを

要せず、今に及びては宜しく祖宗の制度を革めて國を開き、我よりも進みて海外に航し、貿易を行ひ領土を擴張すべしといひ、其三は、一旦貿易を許して彼が心を慰め、其間に武備を整へ、國威能く海外を制し得るを俟ちて貿易を禁すべしといふにあるを擧げ、之に對する齊昭の批評を掲げて曰く、

君<sup>○齊</sup>是を聞給ひて宣ふは、交易を許して其間に武備を整へんといふは臆病者の口實にて、我一代に事なきやうにと願ふ心より出でたる説なるべし、北條は蒙古の使を斬り、三代將軍は船を焼き人を磔にし給ふ、我國の人をして覺悟を定めしむる所以なり、人々覺悟定りぬれば、武備整はずとも敵を防ぐに足れり、況して武備整ふをや、然るに夷狄を近付け交易を許さんには、人の心いよく馳み、いつとて武備の整ふ時や有べき、門外に付め

る盗人を引入て親みながら、盗人を防ぐ事を心せよといふに均し、しかのみならず彼大膽狡黠なる夷人は彼と術を盡し、邪教をもて人を懐けん事鏡に懸たるがごとし、人心は弛み武備は怠り邪教は廣りたらんには、臍を啗むとも及ぶまじきわざならずや。

これ第三説に對する駁論なり。

又大なる船を造て外國に渡り、諸々の國を切從へんといふ事、いと勇ましきに似たれども我はいと危き事に思ふなり、我國の人は輕慥にして其心物に移り易し、欲情薄くして思慮淺し、なまじひに夷狄の業に習て國々に渡りなば、諺にいはゆる鵜のまねする鳥に等しく害のみ有て利なかるべし、交易といふは是彼と取交はし互に益あればこそよけれ、今我國は何一つとして事足らぬものなく、彼國々より持渡る物、多くは奢を勸る無用の品也、阿

蘭陀一國と交易するさへ讒者の憂る所なるに内には諸蠻を引入て交易し、外には大船を出して外國に交らんには、必夷狄の風俗に移され、神國の大害をなさん事まのあたりなるべし、唯彼は大船に乗て寄來るに、我國にては陸地にのみ在て徒に彼を待ち、彼は逃れども我は堅き船なければ逐打事もかなはざるは口惜きわざなれば、大艦を造る事を許し、鯨を捕り米穀を送るなどに事寄せて、常に舟軍を習はしむるはさる事なるべし、されども外國へ渡る事は必停止し給ふべき事なり、漁民の外國に漂着したる者を救はざるは情なきやうなれども、國の安危にはかへ難ければ、兼て漁民等にも告諭し、外國に漂ひたる者は死するに齊しく思はずべし、彼夷人が漁民杯送來る事は、仁愛の心より起れるのみにあらず、是を口實として神國に困を求め、年頃の望を

遂げんとする術なり、○中略されば神國の人貴きも賤しきも、大和魂滿ち瀾りて天照大御神の恩養を一筋に仰ぎ奉り、かの古語にいへる遠き國は八十綱かけて引寄する事の如くなりたらんには、海外の國々打従へん事もさる事なれども、なまじひに遠大なる略を施しなば近き禍のみ引出すべし

これ第二説に對する駁論なり、かくて第一説を是なりとして、君は兎に角に、東照大猷二公の遺訓を守り給ふ事のみ志し給ひき、と結びたり。齊昭の意見即ち東湖の意見なるべきは今更辯説を要せず。この所説は憩齋が新論に論じたる所と符節を合せたるがごとし。蓋し水戸學派の主張茲に存するが爲のみ。而して右の第二説を駁したる文章の末段は、新論の結論と同じく、終局の目的が開國遠略にある事を暗示せるものにして、流石に其用意の周到なるを見る。大橋訥菴の關邪小言は、同

じく攘夷の策論を建てたるものなれども、而も其書中に於て、「是等ノ處置ニ於テハ、西洋學ノ大毒アル蛇蝎ニ均シキヲ洞察シテ、根柢已ニ立テヌル上ハ、變通ノ方無窮ナルノミ」と稱し、將來開國すべきものなるにつきての暗示を與へたり、當時先覺の士の時務を論ずる者概ね皆此用意あり、察せざる可からず。

之を要するに水戸學派の攘夷論は、東湖憩齋が其眞意を洩らしたるがごとく、人心一變し世態革まりなば國を開き貿易を行ひ、又遠く海外に航して其利を收むべきは勿論ながら、今は其時期に非らず、國を開き歐米諸國と交らんには、まづ豫じめ海外の勢力と拮抗し得べき實力を養はざる可からず、然らずして徒らに其舉に出でんには、人心ますます委微して武備は整ふの期なく、將來の禍害は今日の小康に百倍すべしといふにありて、攘夷は其手段に過ぎざりき。

## 五 攘夷論の淵源及其發達

按ずるに攘夷論といふものは、露國南漸の勢力と接觸せることを動機として發生したるものなれども、識者の策論をして茲に至らしめたる眞因自から別に存するものあり。蓋し海外諸國との接觸再び起り、其勢力の壓迫を感じる事深きの際、國民の知識階級は、ほゞ海外の形勢に通じ、また世界に於ける日本の地位が如何なる状態にあるやをも曉り、この實地問題を解釋するに足るべき頭腦を有したりき。かくのごとく世界における日本の地位を自覺せる國民が、新たに來り加はれる外國勢力の壓迫に對して深き杞憂を抱き、其護國の精神を鼓舞せる事怪しむに足らず。これ攘夷の策論を唱ふるに至れる基因の一なり。此時に當り國史國文神道の新しき研究起り、國體を説き尊王をいふ者前後輩出す。彼等は皆國史によりて我帝國の成立を明らかにし、國體の尊嚴を立證し、崇外

内卑の思想の無意義なるを論ずること頗る詳細を極む。就中注意すべきは國史の教育なり。神明統を垂れて列聖之を繼承し、天日嗣の御流れは萬世一系にして、永へに帝國に君臨ましますの事實、開闢以來未だ嘗て他國に屈服せる政事上軍事上の形跡を留めず、國威を毀損せざるの事實は、並に國史の研究によりて立證せらる。かゝる國史の成跡は、國民をして國家の權威を尊重するの自負の念を高めしむ。かくのごとくにして我國民は、國家及國體に就きて自覺し、國家の權威を尊重せんとす。新に來り加はれる外國勢力の壓迫に對して深き杞憂を抱き、其護國の精神を鼓舞し光榮ある國史を毀損せざらんことに努力するは必然の結果なり。これ攘夷の策論を唱ふるに至れる基因の二なり。我國に渡來せる最初の歐人たる葡西兩國民が、通商貿易を營むの傍ら天主教の宣傳に従ひ、且貿易と宗教とを以て領土擴張を目的とする殖民

政策の手段に供したるの事實は、夙に邦入の注意を促したり。かくのごとき殖民政策の暴露は、新に來り加はれる外國勢力の壓迫を感じるの際に及びていたく國民を刺激し、過去の歴史を回想して深き杞憂を抱かしめ、其護國の精神を鼓舞せると少々にあらず、これ攘夷の策論を唱ふるに至れる基因の三なり。

なほ考ふべきは外人を禽獸視するの種族觀と儒教の影響となり、當時外國人は人に似て人に非らず、卑しくいへば獸類に疑ひなし、又短命にして眼を有せず、尿するに片足を擧ぐるに犬の如しなどいへる俗説の行はれしは事實なれども、かくのごときは低級なる一部の群衆のみ、群衆の指導者を以て任じたる識者の與かる所にあらず。従うて此種の種族觀念は攘夷論とは全く没交渉なり、また支那における漢族の文化は、他の種族に比して著しく超越せるが故に、自ら標榜する事高く、

他の種族を賤しむの習俗を生み、更にかの外患に對する敵愾心と相俟ちて、華夷の別に重きを置くに至らしめしが、就中宋の末葉蒙古族の強大なる壓迫に會するや、其念特に強く、折しも世に出でたる大儒朱子の學說に於て、最も痛切に華夷中外の別を論せること誠に其故ありといふべし。而して所謂儒學といへるは、専ら漢族の文明を傳ふるものなれば、之によりて感化せられし我國民が、漢族と思想感情の共通を見るべきは怪しむに足らず、況や宋末紛亂の世和戰の論囂々たるの際、慷慨の士は好んで主戰を唱へ、和議を執れる秦檜王倫の徒を目するに賣國の奸賊を以てせるなど、假令策論としての實際上の價值は大ならずとせんも其生氣ある事蹟は我國民をして殉國の血を湧かしめ、胡澹菴の上表に悲憤の涙を澆ぐ者多かりしに於てをや、我等は文化以後の志士の策論を讀みて儒教の影響せる所全くこれなきにあらざるを知る

なり。然れども攘夷論として専ら其影響を蒙れるは華夷内外の弁に過ぎず、其他立論の便宜より彼の言說事蹟を引證したることはあれども、畢竟行文修辭の上に止まるのみ。蓋し或は攘夷論の發達を助成せることはこれあらん、斷じて攘夷なる策論思想の主體をなすものにあらず。

我國が鎖國の後、再び歐洲諸國と接觸を生せる際、識者の多くは世界に於ける日本の地位を知り又國家及び國體に對しても既に明確なる意識を有し、未だ嘗て國威を毀損せる事なき國史の成跡を回顧して、國家の擁護に努力せんとするに至れることかくのごとくなりしかば、露國の南下を傍觀する能はざりき。吉雄耕牛・工藤球卿・本多利明・林子平が露國を對象として幾多の策論を試み、或は蝦夷地の經營を唱へ、或は國防の急務を論じたるは、やがて攘夷論の發芽なりと稱すべし。されど彼等の多くは露國を敵として争ふの意志を有せ

ず、故に工藤球卿・本多利明・羽太正養等は、露國は有道の國にて妄に他邦を侵略するものにあらずその千島群島を蠶食せるは日本の教化の其地に及ばざるが爲のみ。即ち無人の地を開くと異なるなし、罪は之を忽にせる日本の方にありといひ、蝦夷を拓き土人を教化するを以て、露國の勢力を防止し得べしと考へたり。(赤蝦夷風俗考・西域物語・邊策私辨。)而して吉雄耕牛が露國の侵略策に深憂を抱き、「我竊カニ西人々ノ國ヲトルノ術ヲ知テ、國家ノ爲ニ怖懼ヲ抱ク」といひ、歸山林子平が兵を露領に加へんとする意氣を示したるは、三國通覽其思想が攘夷論に近けるを暗示せるが如し、尋で大原左金吾出で、露國が侵略を以て國是となすことを説き、兵備の講せざる可からざるを痛論し、球卿・利明・正養等の親露論者に一矢を報いたるは益々攘夷論と相近けるの情勢を察すべし。頼山陽が「蒙古來」の詩を賦したるも亦此際の事に係る、

尋で文化元年レザノフの渡來するや、青木與勝は其處分を論じ始めて、「神祖ノ御法律ヲ取テ果斷アルベキコトナリ」とて、露國攘斥の意を述べたりしが答門 幾もなく北海侵掠の變起るに及び、志士熱血の迸る所遂に一變して主戰論となる。平山行藏蒲生君平は其唱首たり。平山行藏上 書・不恤緯 即ち兵力を以て露國の勢力に拮抗せんとするの攘夷論なりき。攘夷論茲に於てか生ず。然れども此時の攘夷論は、單に露國のみを標的となしたるものにして、未だ歐米諸國を併せて敵視するに至らず。蓋し露國の侵掠を主因とせるが故なり。

此時に際し歐洲には佛國の大革命あり、其波瀾は延いて英佛の開戦となり、佛國の和蘭併合となり、更にまた英國の和蘭殖民地侵略となりて、バタビヤの如きも一時其統治の下に立てり。此事實は文化年間我國民の間に暴露せられ、漸く英國に對する危懼の念を抱かしたる折しも、文化五年

英艦フェートン號の長崎における狼藉あり、文政元年同國捕鯨船の寶島に於ける暴行の事あるや、其念愈々強く、遂に歐米各國に對して悉く戒心の情あり。攘夷論の意義も自ら變化し、文政度の水戸學派のごときは歐米の凡てを攘斥せんとするに至り、從うて其攘夷論も漸く應戰雪辱の意味を離れ、將來の變を慮りて之が備を爲すものとなり。即ち今の語を以ていはい、歐米を以て假裝敵國となし、自衛の途を講ずるもの當年攘夷論の實相なり。然れども眞に天下の覺醒を促がさんとせば、砲火の間に相見ゆるの決心を要するが故に、攘夷の實行を期したるのみ。新論の所說實にかくのごとし。かゝる際に當りて再び我國民の視聽を動かしたるは阿片戦争なりき。我國民が之によりて受けたる刺激は甚だ深く、外患の意識特に濃厚を加ふ。天保時代に水藩の攘夷論が、天下を風靡せるもの故なきにあらざるなり。



再び按ずるに、對外策の完備は内政の釐革に俟たざる可からずとは寛政以來識者の通議にして、殊に内政の釐革を急務とせるも彼等に共通せる策論なりき。然れども皆現在の政體により、幕府統治の下に之を行はんことを思ふ。林子平は其尤も早きものなれども、軍制の改革風俗の匡正をはじめ、武士をして土着せしむる事、文武兼備の大學校を起して人才を養成すべき事、産業を盛んにし民をして富ましむべき事などを論じて其他に及ばず。海國兵談、林子平上書、杉田玄伯も「申すも恐れ多き事ながら、此時節は世將亂の萌見えたるやうなり、専ら中興の御政道を行ひ可然御時節かと存る也」と稱し、明らかに變革の兆既に萌したるを説くも、幕政改革の必要を述べたるのみ。野雙獨語古賀侗菴の如き亦然り、疑極論封事○後ち天保年間に著はし、たる海防臆測にも同じ意見あり而して蒲生君平の、外に對するには先づ内を修めざる可からずと論ずるや、幕府をして尊王の實を擧げしむる

のみにあらず、名と勢とを併せて朝廷に歸するの必要を感知せりと雖も、現在に於て到底望みがたきを思ひ、成効を遠き將來に期待せり。故に又現状打破の策論を見るに至らざりき。不恤緯、今書、蒲生君平遺稿、然るに文政年間に至り佐藤信淵は、其遠大なる航海遠略宇内統一の秘策は、必ずまづ國內の統一を必要とし、朝廷幕府對立の變態を改め、天皇親政の下に完全なる帝國の統一を行はんとす、説は載せて宇内混同秘策にあり。

思ふに江戸時代に於ける尊王論は、建國創業の歴史に其源を發するや勿論なりと雖も、其直接の主因としては、南北朝以來天下兵馬の嚮となり、倫理綱常地を描ひ、世を舉りて實力の競争に委ね安寧秩序の紊亂せる事數百年に及びたる反動として、國家の中心を皇室に求めて、再び統一ある社會に復歸せんとする時代の機運にありき。然れども未だ外患に對する意識と相合して、王政復古の

策論を立つる者あらず。而してそのこれあるは實に佐藤信淵にはじまる、誠に當年の偉觀なり。

かくのごとき對外政策を前提とする現狀打破の策論は、我等はまた信淵の宇内混同秘策と殆んど其著作の年代を同じくせる會澤蕙齋の新論に於ても、之を發見する事を得べし。新論の所説が對外思想と尊王思想との接觸を意味するものあるは既に上文に述べたり。然れども文意の形式に現はれし所は、幕府をして尊王を擧げしむることを説き所謂公武合體の説なりしが、幽谷によりて提唱せられ、東湖蕙齋等によりて完成せられし水戸學の歸着が、維新の別天地を開くにありし事、今更贅説を要せざるべし。たゞ之を公言するに憚りしのみ。果して然らば水藩の所謂尊攘の説は、信淵の混同秘策にいへると其軌を一にせる事も亦自ら明らかなり。

共に等しく、かゝる意味の現狀打破の策論を有

しながら、信淵が開國を説き、蕙齋が攘夷論を唱へしを思ふに、其前提たるべき對外策は、開國たると攘夷たるを問はざるものに似たり。然れどもかくの如きは文政度に於ける只一時の現象に過ぎず。信淵の所説が、天保時代には主戰論に變じ嘉永時代にはなほまた過激なる攘夷論となれる事など、既に上文に述べたり。即ち水戸學に所謂尊攘の説なり。蓋し信淵は最初開國論によりて世を導かんとしたるに、天下の人心外患に萎縮して振はず、ひたすら戰の開くるを忌み恐るゝの餘り、通商貿易を以て之を避くべき方便に供せんとする苟安の情あるを見るや、國家の元氣之が爲に衰へ一朝豐端を生じたる場合、眞に恐るべき外國勢力の壓迫に堪へ難きを慮り、今は主戰論によりて民心を統一し、覺醒の機會を促がすに非らざれば不可なりとて、遂に其態度を豹變せるのみ。此説は夢々物語

吞海聲基論に見ゆ、參照すべし。

爾來國家の完全なる統一を理想とし、

天皇親政の事を想へる識者にして、又一人の開國を説くものなかりき。尊王攘夷の意義之を以ては、知り得べしと雖も、なほ左に概論を試み事情の闡明を期せんとす。

## 六 結 論

天明寛政以來開國の説漸く識者の間に行はれ、年を重ねて發達したれども、而も對外の策を建つる人々の中には、或は開國を喜ばず、或は開國を説かざるものなきにあらず。中野柳圃が鎖國論を譯述して、幕府の政策を謳歌せるは、衷心より開國を非とし鎖國を是としたるなり。又林子平・大

原左金吾等が、國防を説き蝦夷地の經營を論じたるも、遂に鎖國の見に及ばず。平山行藏・蒲生君平等は、露國に對しての主戰論を唱へたれども、亦共に鎖鎖の問題に觸れざりき。然るに文政天保の交に及びては、苟も對外の策論を述ぶるものは概ね皆、嘗て我國力の旺盛なる時代に、或は海外

と交通し或は遠略の事ありしを回想して其規模の大なるを讚美し、鎖國以來徒らに國內に蟄伏して前代の雄圖また釋ぬべからざるを歎き、規模を革めて過去の盛時に復歸せんことを思ひ、開國遠略の策を取り、殆んどまた衷心より鎖國政策を謳歌するものを見ざるに至れり。これ當年の識者に共通せる思想なりき。然れども思想の一致を見たるは外國に對しての事にして、國內に對する事に至りては、全く調和すべからざる二つの暗流を有す。嚴正なる意味に於ての開國攘夷二論の分立即ち是なり。

此時に當りて開國遠略の策論を有する識者の多くは、單に銃砲軍艦堡壘等の設備改善のみによりて、我を壓迫せる外國の大勢力と拮抗し、國家將來の完全を保證すべからず、之を運用する國民全體の覺醒と政治の革新とに據るに非らざれば、到底其目的の貫徹しがたきに氣附き、夙に世上の議

に上りしが、國民全體の覺醒を促すに、内外の形勢を説き諭して其効果を擧げんとする者と、之を説き諭すのみに満足せず、外患が目前に迫れるを教へんが爲めに、導きて必死の地に置かんとする者とあり。前説を採る者は主戰を非とし、後説を採る者は主戰を是とす。又國內の政治を革新するに、現状に因循し幕府統治の下に之を行はんとする者と、現状を打破し統治機關をも變革して、天皇親政の下に之を行はんとする者とあり。前説を採る者は幕府の存在を是認し、後説を採る者は其存在を非認す。然るに國民の覺醒を促がさんが爲めに主戰を非とする者は、又政治の革新に幕府の存在を是認したれば、この二つは相合して開國佐幕の説となり、主戰を是とする者は、又幕府の存在を非認したれば、この二つは相合して攘夷尊王の説となる。幕府の末造に於て相對峙して鎬を削れる開國佐幕と尊王攘夷との二論が、社會の一勢力

となれるは實に文政天保の交にあり。されば當年に於て開國といへるは、直に國を開き貿易を營み海外に航して列國と交際するを意味し、攘夷といへるは、必戰を期して完全なる國家統一の大業を成就し、然る後國を開きて國威の宣揚を圖るを意味す。なほ尊王といへるも、只單に皇室を尊ぶに非らず、幕府を廢して天皇親政の大御代を出現するを意味し、尊王の意義も亦自から變化せり。水戸學派の提唱せる所は即ちかくる意義を有する尊王攘夷論にして、佐藤信淵の如き大橋訥菴の如き亦皆然らざるはなかりしなり。

開國遠略の策論が二分して開國佐幕と尊王攘夷となりて、相對立するに至れる情勢ほかかくの如し。これより開國の説を有する者は、たゞ單純なる開國の策議となり、交通貿易さては兵器國防の事のみを説き、攘夷の説を有する者は、暫く交通貿易を胸中に秘して主戰論を鼓吹し、國防の急を

叫ぶと共に王政の復古に熱中す。かるが故に爾後幕府の有司さては幕府の存在を否定せざる開國遠略論者は、開國論を唱へて佐幕に傾き(佐久間象山、横井小楠、大槻磐溪の如きこれなり) 諸藩の志士浪人等にして幕府の存在を否定せる開國遠略論者は、攘夷論を唱へて倒幕後ち遂に討に傾くを始め諸藩に於ける激派の領袖の如きこれなり蓋し自然の勢なり。

要するに水戸學派等の主唱せる攘夷論は手段にして目的に非らず、前提にして同時に結論たるに

## 弘法大師の入定説に就いて

文學博士 喜田貞吉

非らず、又支那思想の影響を主體とする排外の説に非らず、況んや又鎖國因循の保守論に非らず、無意義の戰端を開かんとするの暴論に非らず、天下萬世の爲めに尊嚴なる國體を擁護し、完全なる國家統一の大業を爲さんとする最も進歩したる意見なりきと謂ふべきなり。

(附言) 安政開國前後の際に於ける水藩の行動主張に至りては、なほ特に細説を要するものあれども、之を他日に期せんとす。

### 一 緒言

弘法大師は死んだのではなくて、其の實高野山の岩窟で入定して、生身のまゝに龍華三會の五十

六億七千萬歳の後を待つて居られるのだとの説が古くからある。大江匡房の本朝神仙傳に、

弘法大師……後於金剛峯寺入金剛定、于